英雄少女§ヒーローガール§

心乃　要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄少女§ヒーローガール§

【Ｎコード】
Ｎ０６２３Ｙ

【作者名】
心乃　要

【あらすじ】
主人公最強なお話……だと思います。
恋愛要素とバトルを交えられればいいなあと思っています。
学園×バトル×陰謀、な話……？

序．過去のキオク（前書き）

楽しんでいただけると幸いです。

序．過去のキオク

一人になると時々思い出すことがある。
自分の膝を抱えて顔を埋める。
燃え盛る炎とあちこちで上がる悲鳴。
その中で歪に響く哄笑。
愕然と立ち竦んでいると彼がゆっくりとこちらを向いた。
景色が赤に染まる中煌めく黒の瞳に、自分の姿が映る。口端を吊り上げて嗤う彼に、思うように言葉が出ない。
「なん……で……」
なぜ、こんなことを。
彼は当然のことのように言った。
なんでだって。そんなことをお前が聞くのか、と。
彼のその言葉にただ首を振る。
「そんな……わたし、は……」
こんなこと。
しない、と言い切れるのか、お前が。俺と同じことをしなかったと。
「それ、は……」
そもそも、お前も俺と同類なんだよ。そうだろう。だから、きっとお前も俺と同じことをしたはずだ。
違うと否定したいのに言葉が喉に張り付いて出て来ない。
ほらな、と彼は言った。
お前も結局そうなんだろう、と。
分かっているくせに認めない。知っているくせに、自分だけ綺麗であり続けようとする。
そんな奴だからこそ、俺は――――

序．過去のキオク（後書き）

誤字脱字の報告がございましたら、遠慮なくお願いします！

一・距離（前書き）

楽しんでいただければ幸いです。

一・距離

「……っ！」
胸元を片手で押さえて、出かかった悲鳴を呑みこむ。
嫌な夢を見たせいか背中は汗に濡れており、ひどく身体も冷たかった。
時々心が不安定になると見るいつもの夢だ。
身を起こして大きく息を吐き出す。
「メルレイアちゃん……？　どうかした……？」
同室であるリリアが寝ぼけ眼をこすりながら首を傾げてこちらを見る。
「……別に、なんでもないよ。ちょっと早く目が覚めちゃっただけだから」
咄嗟に笑顔で取り繕うと、リリアはそう？　と首を傾げながらも再び床についた。
彼女が規則正しい寝息を立て始めるのを待ってからメルレイアは再び大きく息を吐き出した。
あまり心配をかけるようなことを言うべきではない。彼女はこの学園に来て初めてできた友達なのだから。
先ほどの夢の余韻を振り払うように首を振ってメルレイアはベッドから下りる。登校時刻まであと二時間近くあるが、汗をかいたままの格好でいるわけにはいかないので、側にかけてある学園の制服に着替える。
制服に着替えた後でもあるし、今さら寝る気も起きないのでメルレイアは読書で時間を潰すことにした。引き出しの中から本を取り出しベッドの上に寝転がってしばらく本を読んでいると、ベッドで休んでいたリリアがもぞもぞと動き出す。
「……おはよう、メルレイアちゃん。早いね」
「おはよう」

微笑んで挨拶を返すとリリアからも笑みが返ってくる。
「私も着替えなくちゃ。もう食堂に行く時間だし」
言われてメルレイアは机の上に置いていた懐中時計を手に取った。
「あ、ほんとだ」
どうやら本に没頭しすぎていたようだ。時間はあれから一時間以上経っていた。
「私も着替え終わったことだし、食堂にいこ。早くしないと座るとこ無くなっちゃう」
「うん」
頷いて部屋を出るリリアの後を追う。
別棟へ続く廊下をしばらく歩くと、生徒たちの賑やかな声が聞こえてくる。既に食堂に生徒が集まっているらしい。
「やばっ。急ご」
彼女と共に食堂へ向かって急ぐと、僅かながらまだ席が残っていた。
「良かった、まだ席残ってる。早く食事選んで席座ろ」
「うん」
生徒の列に加わりメニューの中から食事を選び、二人は席につく。
「良かったあ、席取れて。ね、メルレイアちゃん」
「うん。部屋で食べるっていうの、私あんまり好きじゃなかったから、ほんと良かった」
「そうよね。あんな埃臭い部屋で食べてたら食事が不味くなっちゃうわ」
「ええと、そこまで……？　にしても、リリアちゃんいつもすごいね」
引き攣った笑みを浮かべながら視線で彼女の前の食事を示すと、彼女はそう？　と不思議そうに首を傾げた。
「これくらい普通じゃないかしら？　みんなが少なすぎるのよ。それでお昼まで持つなんてびっくりだわ」
「……」

これには苦笑を返すしかないメルレイアである。
なにせ彼女の目の前には三人分の食事が並んでいるのだ。これが朝ごはんだと言える者がどこにいるだろうか。
（私は絶対にあんな量食べられない……）
本当に彼女の食事量にはいつも驚かされるというか、感心させられる。よくもまああの細い身体にあれだけの量が入るものだ。
「さ、冷めないうちに食べましょ」
促されて食事に手をつけようとしたメルレイアは突如上がった黄色い悲鳴に目を丸くした。
「ああ、またいつものあれね……。メルレイアちゃんはこの学園に来てそんなに日にち経ってないから知らないだろうけど……って説明するより見てもらった方が早いかな」
そう言われたメルレイアはひとつ瞬きをして、女子たちの歓声のする方へと目を向けた。
視線を向けた場所には、数人の男子生徒の姿があった。
「今日は間が悪かったわね……六人同時に食堂に現れるなんて。うるさくて食事に集中できないわ」
食事を口に運びつつ唸るリリアの言葉を聞きながら、メルレイアは六人を観察した。
まず最初に分かったのは総じて顔が整っていることだった。背も高く――少なくとも自分よりは高く、身体は華奢なようでしっかりしていそうだ。容姿からして女子生徒があのような声を上げるのも頷ける。以前自分のいた学園にはあいった人物はいなかったが、本の中のように本当に絵に描いた王子様のような人物って本当にいるものなのだな、と素直に感心してしまうメルレイアだった。
「うわ、しっかもこっちに来るし！」
別のところに行けばいいのに、と苦い顔をして周囲を見回すリリアは低く唸った。
「あー、席が……！」
悔しげに唇を噛む彼女に首を傾げる。なぜそこまで関わりを避け

ようとするのだろうか。
不思議に思って訊ねてみると、リリアが苦笑しつつ答えてくれる。
「あー、えっとあの人たちと関わると他の女子生徒たちに睨まれるし、あとが怖いから」
「えっと、女の嫉妬は怖い……っていうあれ？」
「そうそう」
「……なんの話をしてるのかな？」
そんな話をしているうちにいつの間にか、会話の中心人物たちがこちらへとやって来ていた。もうほとんど目の前だ。
「いえ、別に」
リリアが澄ました顔でそう答えるのに倣い、メルレイアも苦笑を浮かべながら頷く。
「そう？　まあいいけどね。……悪いけど、相席させてもらえるかな？」
笑顔で言う金髪の青年にリリアがどうぞ、と短く答える。
「クラウスがそこなら俺はこっちの席に行くわ。あ、レイノル先輩たちもここ座ります？」
「ああ。ありがとう、ライル君。お言葉に甘えてそうさせてもらうよ。……それにしても、リリアさん、いつもすごい量だね」
「別に普通ですよ？　クラウスさん。皆の量が少ないだけですって」
言いながら口にせっせと食べ物を運ぶリリアに、クラウスと呼ばれた青年が苦笑する。
（……リリアちゃん、ほんとあんなに細いのによくあれだけ身体の中に入るなあ……）
彼が苦笑するのも無理ない。男でも普通あれだけの量は食べないだろう。
「……そういえば、リリアさん。こっちの子は？　見ない顔だけど」
首を傾けただけだというのに、気品のようなものが漂う。容姿といい所作といいどこかの王子様か、と問いたくなるような感じだ。
「転校生ですよ。まだ転校してきてから一週間ぐらい……だったよ

ね？」
確認するように視線を向けられたメルレイアは頷いた。
「へえ。俺はクラウス・ハーウェンハイト。よろしく。君の名前は？」
「メルレイア・ファーティリーです。よろしくお願いします」
笑顔で軽く会釈をしたメルレイアは内心で冷や汗をかいていた。
（うっ……視線が突き刺さる……）
本人たちは気づいているのか分からないが、食堂にいるほぼ全員の女子たちの視線が自分たちに集中している。
（こわ……）
これに懲りてなるべく彼らとは関わらないようにしようと誓うメルレイアである。
「あ、ついでに俺も。俺はクラウスの友達のライル・シュテッゼン。よろしくね、メルレイアちゃん」
「あ、はい。よろしくお願いします」
とりあえず愛想良く笑顔を浮かべる。
会話が一区切りしたので、メルレイアは自分も食事を口に運ぶ。
食事を食べながらメルレイアはちらと横に座る彼らを盗み見る。
（なんか種類は違うけど、皆きらきらしてるなあ……）
短い間なら目の保養になりそうな気もするが、長時間の直視は目に悪そうというか、きつそうである。
「……ん？　なにかな？」
「……あ、いえ、なんでも」
見ていたのがばれてしまったらしい。笑顔で首を傾げられてメルレイアは引き攣った笑みを浮かべながら首を振った。
「そう？」
「ええと……」
まさか観察してましたなんて本人に向かって言うことはできないので、メルレイアは目を泳がせ言い訳を考える。
「……きゃあ！」

「――！」
突如上がった悲鳴にメルレイアは思考を停止させる。
声の上がった方へ目をやると食堂の調理師であろう人物が、顔を青くしながらなにかを指差す。
「な、なにかいたわ。速すぎて見えなかったけど……ほら、今あそこに！」
食堂内に女子の悲鳴が上がるが、すぐに静かになる。
静まり返った食堂内で縦横無尽に動き回るその影を生徒たちは部屋の端に避け、怯えながら見つめていた。

一・距離（後書き）

誤字脱字にお気づきの方、遠慮なくご指摘お願いいたします！

二・影の正体（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

二・影の正体

（……右、左……上……下……右、左……）

その影を目で追っていたメルレイアはよし、とひとり心の中で頷いた。

生徒たちの中から抜け出したメルレイアに、リリアが困惑した様子で声を上げる。

「……メルレイアちゃん？」

生徒たちが食堂の端に固まり輪のようになっているため、どうせあの影は外に逃げることはできないだろう。

ひとりだけ生徒たちから外れた自分を警戒してか、その影は攪乱するように左右に動く。

さらに足を一歩進めると、獣の低い唸り声が聞こえ始めた。その声と共に影が近づいてくる。

どうやら影は自分の身の危険を感じて攻撃を仕掛けて来ようとしているらしい。

この騒ぎを収めるには捕まえて影の正体を暴く必要があるので、向こうから飛び込んできてくれるなら好都合だ。

『グルアァアア！』

獰猛な唸り声を上げて影が突っ込んでくる。

「メルレイアちゃん！」

リリアの悲鳴にも近い声が自分の名を呼ぶ。

大丈夫、と言おうとした瞬間腹部をものすごい衝撃が襲った。衝撃のあまりメルレイアはその場にへたり込む。

「った……って、こら、大人しくしなさい！」

痛みと衝撃を堪えながらメルレイアは懐に入ってきた影を必死に押さえ込む。

「メルレイアちゃん、大丈夫！？」

駆け寄って来たリリアにうんと頷いて、メルレイアは両手で懐の

生き物を抱き上げた。
尖った二つの耳に、ふさふさの見事な尾。その体毛は金色にも似ていて。
「……って、狐？」
もっと獰猛な動物かと構えていたメルレイアは拍子抜けしてしまう。
それを感じたのか狐が隙あり、とばかりに暴れ始める。
『放せ！　放せったら放せ！』
暴れる狐は体を動かすだけではメルレイアの拘束から逃れられないと感じたのか、その鋭い牙を彼女の手に突き立てた。
「いっ……！」
痛みに一瞬力が緩みかけたが、メルレイアは狐の身体を放しはしなかった。
「落ち着いてってば。別になにもしないから。……ほら、ね？」
狐の耳が垂れ、牙がゆっくりと手から離れていく。
『……ほんとになにもしないな？　大丈夫だな？』
「うん。私が保障する」
『……そっか』
狐の豊かな尾がゆらりと揺れる。
騒動が収束し安心した生徒たちの口から次々に安堵のため息が漏れる。
生徒たちはやれやれ人騒がせな、といった様子で席に着き食事に戻り始めた。
「ありがとね。メルレイアちゃん。それにしても、意外と度胸あるのね……って、手！」
「うん？」
慌てた様子でリリアが自分の左手を示すので首を傾げつつそちらを見ると、皮膚が裂けて出血していた。
「大袈裟に見えるけど、そんなに痛くもないし、大丈夫だよ」
笑って手を振るとリリアの目がぐっと吊り上がる。

「大丈夫じゃないって！　保健室に行こ！　ほら、立って！」
「はい！」
リリアの剣幕に気圧されて、メルレイアは勢いよく立ち上がった。
「一緒においで」
床に狐を下ろしてメルレイアはリリアに大人しくついていく。
綺麗に磨かれた廊下を眺めながらしばらく歩くと、リリアの足が止まった。どうやら保健室に到着したようだ。
「ただいま外出中……って、もう、なんで肝心なときに先生いないのよ……！　メルレイアちゃんはそこに座って。消毒して包帯巻くから」
「あ、うん」
かなりリリアは怒っているようなので、ここは大人しくリリアに従っていた方がよさそうだ。
もー、消毒薬はどこなのよ、とぶつぶつ言いながら探しているリリアから視線を外し、自分の側にちょこんと座っていた狐に声をかける。
「……ねえ、名前を教えてくれる？　名前がないと呼びにくいから。あ、私の名前はメルレイア。メルレイア・ファーティリー」
『メルレイア？』
自分の名前を聞いた狐がぶるぶるっと身を震わせた。
『ふうーん。メルレイアだな、覚えたぞ。俺の名前は……ルアだ。もっとすごい名前なんだけど、長いからな』
「ルアね。……ルアは精霊？」
『そうだ。俺は火を扱ったりするのが得意なんだ』
頷いて胸を張るルアにくすりと笑う。
「話の際中に悪いんだけど……消毒薬見つかったわ。ほら、手出して」
包帯と消毒薬を手にしたリリアが向かいの椅子に座り、メルレイアの手を取ると消毒薬を垂らし丁寧に包帯を巻きはじめる。
「そこの狐、言葉を喋れるってことは精霊、なのよね？　しかも上

級の。とてもそんな風には見えないけど」
「そうみたい」
メルレイアは苦笑する。
「あ、さっき教えてもらったんだけど、この子の名前はルアって言うんだって」
「ふうん……ルアね。で、ルアはなんであんなところにいたの？」
『……』
リリアの言葉にルアは委縮したように耳を垂らし、目を伏せた。
「……ルア？」
『……怖い奴がいたんだよ。黒くて怖いもの。俺、それから逃げてあそこに隠れてたんだ。でも、人間に見つかっちゃって……』
ルアの尻尾が不安げに揺れる。
「黒くて、怖いもの？」
メルレイアはリリアと顔を見合わせる。
『そうだよ。いるんだ、ここに。黒くて怖いもの。……ここにいちゃいけないものが』
きゅうとか細く鳴いた狐の姿は、とても嘘を言っているようには見えなかった。

二・影の正体（後書き）

不定期更新です

誤字脱字のご報告ございましたら遠慮なくお願いいたします

三．猫と少年と少女（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

三．猫と少年と少女

昼食を終えたメルレイアはひとり温室へと足を運んでいた。
自分たちは授業があるのでルアにはそれまで保健室で大人しくしているように言っておいたのだが、授業を終えて行ってみると彼に姿はそこには無かった。
リリアと共に捜せる場所は捜したのだが、それでも彼は見つからない。そのうちリリアがいずれ用があれば向こうから出て来るわよと、言い捜索は中止になった。
その言葉を受けてメルレイアは行くあてもないままぶらぶらと学園内を歩いていた。そうしていたら、いつの間にか自分の足は数日前に見つけた温室へと向いていた。
「今日も良い天気……」
空から降り注ぐ心地良い陽射しにメルレイアは目を細めた。
メルレイアは温室の中にある逞しい樹の側に腰を下ろす。
温室は廃棄されてしまったようで鉄の骨格はところどころ錆びてしまっていて、雨や風を防ぐはずの覆いにはところどころ穴が開いている。
以前は手入れをされて綺麗に揃えられていたであろう草花は今や縦横無新に生え、咲き誇っていた。
一見荒れたように見えるこの温室がメルレイアは好きだった。人間の都合で窮屈に枠に収められてしまった草花より自然の強さや逞しさを感じられていい。
時折吹く風が心地よい。温かい陽射しと風が相乗効果を為して眠気を誘い、瞼が自然と落ちてくる。
（寝ちゃいそう……）
あと一時間ほどしたら授業だというのに。
そうやって自分を叱るが、体は言うことを聞かない。睡魔の誘惑が体を支配していく。

（……寝ちゃう……）
「ニャー」
意識が混濁しかけたメルレイアは、側で鳴き声がしたのに驚きぱっと目を開けた。
「な、に……？　猫？」
それも一匹では無かった。二匹いた。一匹は白に近い光輝く銀の猫で、もう一匹は黒曜石のような美しい黒猫。
「なに？　あなたたちここに昼寝しにきたの？」
ごろごろと喉を鳴らしてすり寄ってくる猫たちに、メルレイアは手を伸ばす。顎をくすぐるように撫でてやると、それが心地いいのか猫たちは目を細めてにゃあ、と鳴いた。
「あなたたち、首輪がついてるわね？　……ええっと、ルヴィアとリヴェール？」
「「にゃあー」」
首輪についたプレートに彫られた名前を呼ぶと、まるで返事をするように二匹が鳴いた。
「学園で飼われてる猫なのかな……？」
首を傾げて呟くメルレイアの膝の上にリヴェールが上り、前足の上に頭を乗せて丸くなる。
「あ、寝ちゃった……？」
耳がひくひくと動いているので、寝てはいないのだろうか。よくわからない。
（気持ち良さそうだなあ……）
膝に乗っているリヴェールの頭を撫でながら、メルレイアは思い出していた。
今朝あの日の夢を見た。
あまり思い出したくない記憶だ。あの凄惨な光景と衝撃で一種のトラウマになっているのかもしれない。
自嘲めいた笑みを浮かべてメルレイアは目を閉じた。
無意識に温室へ足が向いていたのはこのせいだったのかもしれな

い。あの日以来、なにかあるとひとりどこか人のいないところに逃避する癖がついてしまっている。自分でも良くない傾向だと思うのだが、治せない。心が均衡を保つために身体をそう動かしているのだ。

瞼の裏にあの日の光景が甦る。

あたりは一面炎の海。その中央にいる人物は――――

がさがさと草花をかきわけるような音に、メルレイアは目を開けた。

「……？」

聞き間違いか、とぼんやりとしていると、突然人の声がした。

「……驚いた」

ここはあまり人が来ないと思っていたのに。

顔を上げると、そこには金髪碧眼の優しそうな青年が立っていた。食堂で会った、あの人だ。

ゆっくりと彼は歩み寄って来て自分の側で膝を折った。

「ええと、クラウスさん……？」

なにに驚いたというのだろう。

困惑気味に眉を寄せると、クラウスがああ、と笑って答えてくれた。

「この子たちのことだよ」

言って彼は視線でルヴィアとリヴェールを示した。

「俺でも触らせてもらえるのに、一ヶ月近くかかったんだけどね……」

そう言って彼はルヴィアの頭に手を伸ばし撫でる。ルヴィアは嫌がる素振りを見せることもなく、されるがままになっている。

「……クラウスさん、あの」

メルレイアの言葉は彼の言葉に遮られる。

「クラウス」

目を瞬いて彼の顔を見つめる。

「……ああ、名前ですか？」

「うん。クラウスでいいよ。同い年なんだから。あと敬語もやめて普通に話して欲しいかなあ？」
「ええと、でも……」
なんと言っていいものか、とメルレイアは言い澱む。
なにをしても優雅に見える所作やきらきらしたあの雰囲気というか気配でメルレイアには彼がどうも同い年には感じられないのだ。
「でもはなし。俺もメルレイアって呼ぶから、そうして？」
有無を言わせぬ笑顔。
「え、はい……じゃなくて、うん」
その笑顔を前にしては頷くしかないメルレイアである。
「で、さっき俺になにか聞こうとしてたよね？　なにかな？」
笑顔で首を傾げられてメルレイアはしどろもどろになりながらも言った。
「あ、いや、よくここに来るのかな、って……」
「時々ね。人に見つかりたくないときにはよく来るんだよ。ここって校舎から離れてるし、今はもう使われてないからあまり人が来ないんだ」
「ああ、なるほど……じゃなくて、そうなんだ」
（うう……敬語抜きって難しい……）
「君はどうしてここに？」
「私は」
次の言葉を探してメルレイアは一度口を噤んだ。
彼の雰囲気のせいでもあるのだろう、素直に話しかけた自分にメルレイアは笑ってしまう。
「少し日向ぼっこをしようと思っただけです……それだけ」
「そう？」
自分の発言を彼がどう捉えたのかはわからない。もしかしたら彼はねにかに気づいたかもしれない。
しかし、彼は悠然と笑ってそれ以上なにも聞きはしなかった。
彼とは出会ったばかりなのだから、当然かもしれない。

だが、今のメルレイアにはそれが都合がよかった。そう、こんなこと。
誰にも、聞かれない方が、知られない方がいい。
だってその理由までを問われてしまったら。
その先を考えるのが怖くて、メルレイアは頭を振って膝の上のリヴェールの頭を撫でた。

三．猫と少年と少女（後書き）

不定期更新です。

四．黒い、影（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

四．黒い、影

適当なところでクラウスに別れを告げたメルレイアはきょろきょろと辺りを見回し、なにかを捜すようにしているリリアを見つけた。
「――あ、いた！　どこ行ってたの？」
「ええと……」
歯切れ悪く返事をするメルレイアに、リリアはこれ以上の追及を諦めたようで、怪我をしていない手の方を引いて早足で歩き出す。
「まあいいわ。来て！　次の授業は移動教室なんだから、早く行かないと！」
転校してきて不慣れなメルレイアのために、彼女はわざわざ捜しに来てくれたらしい。
そう考えると思わず自然と口元が綻ぶ。
（そういえば今日の午後からの授業って特別授業なんだっけ……）
「ほら、ここ！」
扉を開けて中へ入った二人は、学級委員長であるシェリアに頭を下げる。
「遅れてごめんなさい」
「すいません」
そんな二人に彼女は落ち着いた様子で言った。
「大丈夫ですよ。ぎりぎり一分前ですから。それじゃあ二人には席に着いていただいて」
頷いて二人は空いた席に腰かける。
「では、これから創立祭本番に向けての一週間の計画を立てます。創立祭の出し物についてですがこれは演舞劇に決まっていますが……」
「……創立祭？」
初めて聞く内容にメルレイアは首を傾げた。
メルレイアの呟きに、小声でリリアが答える。

「創立祭っていうのは、そのまんまの意味で、学校が創立された日を祝うお祭りなんだけど……ここまでなら普通の学園と変わらないんだけど、この学園の創立祭に来る来賓の人たちが問題、というか……」
「……来賓が問題？」
二人の小声のやり取りをよそにシェリアの話は進んでいく。
「……で、クラウディウス殿下やマリアスノウ王女様がいらっしゃるので、くれぐれも本番で失敗をしてしまわないよう、しっかり練習しましょう」
「――ね、こういうこと」
「……な、なるほど」
それは確かになにかあったときは問題だ。王族の前で失敗しては学園の面子に泥を塗ることになる。
「……それで演舞劇って？」
「演目は昔の話の、ほら、人が悪しき神を封印した話あるでしょう？　あれをやるのよ」
「へえ」
リリアがいう昔話というのは、五百年近くも前に国を闇に沈めかけた異形の神を竜と共に人が封印したという竜神伝だろう。
「――それで、メルレイアさん」
「はいっ！」
唐突に名前を呼ばれたので、思わず大きな声になってしまう。
「……ええと、あなたは転校してきてばかりで、演舞劇の様子も見ていないので、まず練習の様子をしっかり見てくださいね。あとで外の広場に移動しますから」
「はい」
頷くメルレイアにシェリアも微笑み、頷きを返してくれる。
「……それで、演舞劇、リリアちゃんはなにをやるの？」
「私？　私は演出役。魔術を使って幻を見せたり、精霊を喚び出して炎を操ったり」

「へえ、そうなんだ」
（演出……かあ。それぐらいなら、私もできる、かな……）
あまり大きなことはできないが幻を見せたり、炎を操ったりする程度の魔術なら扱える。
「それで、主演は誰がするの？」
「レヴィンよ。家が騎士の家系で剣の扱いは一番上手いから」
「ああ、そっか。剣舞やるところもあるよね。その話」
「そう。それで、竜とか背景は全部幻で作るから、必要なのは、レヴィンがつける面と着る服ぐらいで……費用なんてほとんどかかってないのよね、この出し物」
おかげで費用が浮いたから助かってるんだけど、とリリアは笑う。
「……でも、費用はかかってないけどその分、自分たちの能力を目一杯引き出さなきゃならないから、大変なのよね……まだときどき幻とレヴィンの舞が合わないことがあるし……」
「なんか、大変そうだね……」
目を丸くして呟くメルレイアにリリアが呆れた表情で言う。
「……メルレイアちゃん。大変そう、じゃないでしょ。他人事じゃないんだから。メルレイアちゃんもそれを一緒にやるんだよ？」
「ああ、うん。そうでした」
「まったく、もう。――あ、もしかして今から移動？」
シェリアの話をそっちのけで二人で話をしていたので、他のクラスメイトたちが移動し始めているのに二人は今さら気づく。
「やば、行こ！」
「う、うん」
慌てて他のクラスメイトたちの後を追う二人は、すぐにその集団と合流する。
「そういえば、他のクラスも全部皆なにかするの？」
全てのクラスがするとなると、一学年が五クラスなのでそれ掛ける三。十五組も出し物をするとなると一日では終わらない気がするのだが。

「ああ、出し物をやるクラスは代表制でその年によって違うの。今年、一年は私たち三組と四組で、二年の先輩たちは一組と二組、三年の先輩たちは五組と一組かな」
「じゃあ、午前と午後に三組ずつに別れてやるんだ」
「そう。今年は私たちが最初だから、気合入れていかないと」
「うん」
「それじゃあ、皆さん。準備をお願いします」
外庭に設けられたホールについたのか、先頭にいたシェリアが声を僅かながら大きくした。
「それじゃ、私行ってくるね」
「うん、いってらっしゃい」
小さく手を振って生徒たちがそれぞれの配置に着く中、メルレイアは手招きをするシェリアの側に立つ。
「私は全体の指揮だからここにいるんだけど……メルレイアさんも此処にいてもらっていいかしら。とりあえず最後まで通して、この演舞劇を見ての率直な意見を言っていただきたいのだけれど……」
「あ、はい。わかりました」
「それじゃあ、皆さん。始めてください」
シェリアの声を合図に、演舞劇は始まる。
話の始まりは、異形の神が国を沈めようと暴れているところから始まる。
悲嘆と絶望に暮れる人々は、この国を守護するリオール神に祈る。
どうか国を、私たちをお救いください、と。
その願いに応えたリオール神は一人の人間に力を与え、自分の使いとして竜を地上に送った。
リオール神の加護を受けたその人間は、リオール神から遣わされた竜と共に様々な戦いの果てに異形の神を封印するのに成功する。
人々は異形の神の脅威が去ったことを喜び、平穏になった国の民はそれぞれの生活を取り戻し皆幸せに暮らした。
あくまで昔話なので体良く書いてあると言えるが、人が異形の神を

封印したというのは本当らしく、国のどこかに異形の神が封印されている神殿があるという。
悪用されてはまずいので、その場所を知るのは王族のみだと聞いている。
話の内容を思い出しながら、メルレイアは演舞劇の様子を見守る。
（ああ、国が荒らされていく場面なんだ……）
人々の心と国の状態を表しているのだろう、舞台が一気に暗く陰鬱としたものに変わる。
そして、その色は黒から紅に変化した。
一面紅の海だ。おそらくこれは、炎なのだろう。
幻聴なのか、演出なのか、どこかから人の悲鳴が響いてくる。
心臓が不自然にどくん、と脈打つ。
思い出したくない情景が甦る。
あの日も一面炎の海だった。
だからこそ、俺はお前を――――
「う、あ……」
胸を押さえて苦しげに喘ぎ声を漏らすメルレイアに気づいたシェリアが慌てた声を上げる。
「メルレイアさん、どうかしたの？　大丈夫？」
（苦しい。き、もちわるい……）
メルレイアの中でなにかが蠢く。それが体をかき回しているようで、息が苦しい。吐き気がする。
（うっ……）
メルレイアはたまらずその場に蹲る。
「メルレイアさん、大丈夫？　保健室に行った方が……」
「……きゃあ！」
「なんなんだ、うわあ！」
あちこちでクラスメイトたちの悲鳴が上がる。
「なに？　どうしたの？」
シェリアは蹲ったメルレイアの側に膝を折りつつ、周囲を見回し

た。
「なに、これ……？」
召喚された精霊たちは苦しげに身を捩り、作りだした幻は歪み全ての色が混ざったような奇妙な色に変化していた。
「なんなんだよ、幻影術が解除できないぞ！」
「私の召喚術もよ」
クラスメイトたちが恐怖の滲んだ声で口々に言い合う。
（はあ、はあ……）
大きく息を吸いメルレイアは呼吸を整える。それを何回か繰り返すことでようやく呼吸が楽になった。
「一体なにがどうなっているの……？」
シェリアの愕然とした言葉に、メルレイアはっと我に返る。
まずい。
その途端に周囲の幻が消え去り、召喚されていた精霊たちが送還されていく。
「一体、なんだったんだ……？」
呆然とクラスメイトのひとりが呟く。
「う……」
「……あ。メルレイアさん、大丈夫？」
ふらりと立ち上がったメルレイアを支えながらシェリアは呟く。
「本当に一体なんだったのかしら……？　あ、ねえ、メルレイアさん？」
「……ちょっと保健室に」
「一人で大丈夫？　顔、真っ青よ？」
「平気です……」
本当は平気ではない。しかし、今のメルレイアはなによりもひとりの空間が欲しかった。
「そう。わかりました。気をつけてね」
シェリアは自分の言葉に納得はしていないようだったが、それ以上なにも言わずに受け入れてくれた。

「……はい」
軽く頭を下げて足を進める。
はやく。早く此処から遠ざからないと。
メルレイアは霞んだ視界の中で歩いていた。
自分がどこに向かっているかわからなかった。ただ誰もいない場所を探していた。
ようやく見つけたそこは、旧校舎の本棟と職員棟とを繋ぐ渡り廊下だった。
柱にもたれかかってずるずるとその場に崩れ落ちたメルレイアは、はあと息を大きく吐き出した。
古い煉瓦づくりの柱から伝わる冷たさが心地よく、吐き気も引いていく。
（……危なかった……）
メルレイアは胸を押さえる。
あの魔術の暴走。あれはたぶん、自分の魔力が流れ出て他の魔術に干渉してしまったせいだ。シェリアを含めたクラスメイトたちはそれに気付いていなかったが。
あのままあの場にいたら、魔術が本格的に暴走して被害が出ていたかもしれない。
いいかい。君の力は大きい。だから、いつも心は湖の水面のように、波風を立てないようにしておくんですよ。でないと大変なことになってしまいますからね。
師の言葉が甦り、メルレイアは笑った。
今まではこうじゃなかったんですけどね、師匠。
ふうと息を吐いたメルレイアはどうしたものか、と悩む。
（不安定なまま戻ってまた皆に迷惑をかけるわけにはいかないし……）
視線を上に向けて、上手く回転しない頭で考える。
（……ん？）
一瞬、影のようなものが視界を掠めた気がした。

しかし次に瞬きをしてそれがなんだったのか確認したときは、そこにはなにもなかった。
気のせいだったのだろうか。
首を捻ったメルレイアはこつ、と響いた靴音に振り向いた。
（……ええと、あのとき食堂にいた人……？）
名前は知らないが、ライルが先輩と呼んでいた気がするので、おそらく二年生だろう。
「やあ」
戸惑い気味に見上げるメルレイアに、その人はにこやかに挨拶をした。

四．黒い、影（後書き）

不定期更新です。

五．彼と黒い影（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

五．彼と黒い影

（なにか、妙な気配がするな……）

レイノルは険しい面持ちで辺りの気配を探る。

旧校舎では昔盛んに魔術研究が行われていた。そのためか旧校舎全体に魔術の力が染み込んでいて、気配を探りづらい。

レイノルは剣呑に目を細めた。

（だが、なにかいるのは間違いない……）

なにか異質な者が、この魔術の力が染み込んだ旧校舎を隠れ蓑に潜んでいる。

それを早く捜して仕留めなければ。

それが自分の役目だ。

周囲を警戒しながら進んでいたレイノルは、肌が泡立つような異様な気配の出現に息を詰めた。

「――――！？」

振り向くがそこにはなにもいない。

『ウウゥゥゥ……』

レイノルは弾かれたように顔を上に向けた。

いた。なにか黒く蠢く塊のようなものが。

「ケルベロス！」

レイノルは鋭い声で随従していた精霊の名を呼ぶ。

「グゥウウ……！」

ケルベロスが口から金色の炎を吐く。

しかし、その炎は呆気なく躱されてしまった。液状の形をして動きは鈍そうに見えたが、意外と素早い。

「ちっ……！」

黒い液状の物体は、滑るようにして旧校舎の壁を伝い逃走を始めた。

「逃がすな、行け！」

ケルベロスにそう指示を出し、自分も追う。
レイノルは階段を駆け下り、ケルベロスは段などおかまいなしに飛び降りた。
「……逃げられると思うな」
ケルベロスの動きが良かったおかげで、黒い液状の物体を挟み打ちにすることができた。
黒い液状の塊の表面にぎょろりと気味の悪い赤い瞳が現れ、自分とケルベロスを交互に見る。
「ケルベロス！」
ケルベロスが口を大きく開き火炎の球を黒い液状の塊にぶつける。
それと同時にレイノルは呪詞を紡いでいた。
「我が求めるは、光化の剣。我が――なに！？」
『ウルァアアウ』
炎の球を躱した黒い液状の塊が、ケルベロスの頭の上に飛び乗った。ケルベロスはそれを取り除こうと必死に頭を振るが、離れない。
ケルベロスの頭の辺りから焼けるような音がし、黒い煙が上がる。
『グワァアア……！』
頭から黒い液状の塊が離れるのと同時に、ケルベロスが苦しげに呻いて倒れる。
「ちっ……！　もういい、お前は戻れ……！」
舌打ちをし、レイノルは片手を振った。
ケルベロスの体の下に魔法陣が浮かび上がり、体がその中に沈んでいく。
レイノルはケルベロスが送還されたのを確認しないまま、黒い液状の物体を追った。
速い。視界に留めておくので精一杯だ。足を止めれば、逃げられる。
レイノルは自分の準備の悪さに歯噛みした。
こんなことになるなら精霊をもっと喚び出しておくんだった。
しかし今さらそんなことを思ってもどうにもならない。

息が上がってきた。このままでは見失ってしまう。
苦しくなる呼吸に耐えながら走るレイノルの先で、黒い液状の塊が唐突に動きを止めた。
「なんだ……？」
壁に手をつきながらもレイノルは黒い液状の塊から目を離さない。
黒い液状の塊にあの怖気の走るような赤の瞳が浮かび、ぎょろぎょろとその体の上を動き回る。
と、突然黒い液状の塊がかっと目を見開き、体を波打たせた。やがて体が半透明になり、空気に溶けていく。
逃げられる……！
レイノルが手を打つより、黒い液状の塊が姿を溶かす方が早かった。
「くそっ……！」
レイノルは拳を壁に打ちつけた。
逃げられた。まったく、この馬鹿野郎。
自分を自分で毒づく。
こんなことをしても、どうにもならないのはわかっていたが、そうせずにはいられなかった。
乱れていた呼吸を整えたレイノルは、旧校舎本棟から新校舎へと戻るべく足を進める。
いつの間にか一階まで来ていたらしい。渡り廊下はすぐそこだ。
険の残る顔のまま進んでいたレイノルは、人の気配と耳に届く荒い息遣いに歩を緩ませる。
（誰だ……？）
そこには柱に背を預けて真っ青な顔をしている少女がいた。
こつ、と自分の足元で高い音がする。
青白い顔をした少女が自分に気づいて顔を上げる。
（しまった……）
そう思ったときには反射的に、いつもの嘘の笑顔と挨拶が口をついて出ていた。

「やあ」

五．彼と黒い影（後書き）

不定期更新です

六．先輩と少女（前書き）

短いです。
すいません。

六．先輩と少女

「……あの、先輩はどうして此処に？」
「君こそ、どうしてこんなところに？　ここは普段立ち入り禁止だよ？」
「……あ、それは知りませんでした。すいません」
謝りながらメルレイアは内心首を捻る。
だったら、彼も此処にいてはいけない気がするのだが、どうなのだろうか。
「君は一年生……だよね？　名前は？」
「メルレイア・ファーティリーです。三組の」
「僕は二年四組のレイノル・エルディリア。よろしく。……それにしても。君、顔色悪いけど大丈夫かい？」
柳眉を顰めてレイノルが屈んで顔を覗きこんでくる。
黄玉似た色の瞳を縁取る長い睫毛。すっと高い鼻に男性にしては白い肌。髪は一見短いように見えるが、どうやら頭の頂上近くで括っているようだ。愛玩人形のように整った顔だ。
「……はい。今は。ちょっと演舞劇の練習中に気分が悪くなってしまって……」
そんな顔が間近に来て、居心地の悪くなったメルレイアは視線を逸らす。
「ああ、三組は竜神伝をやるんだったよね」
そんな彼女の様子に気分を害した様子もなく、レイノルは笑顔のまま言った。
「保健室に一緒に行こうか？」
「あ、いえ……大丈夫です。保健室に行ったらなんか大袈裟にされちゃいそうですし……。少し一人で外の空気を吸っていたら楽になりましたから」
「そう？」

本当かなあ、とでも言うように微笑を絶やさずに首を傾けるレイノル。
「大丈夫です」
もう一度そう強く言って、メルレイアはそれじゃあ戻ります、と頭を下げ立ち上がると先ほどよりも幾分か強い足取りで歩き出した。
背中に視線を感じながらも、メルレイアは振り返らずに黙々と足を進める。
これ以上ここにいたら余計なことを言ってしまいそうだ。
人は弱っているときに誰か側にいると、本音を言ってしまいやすいものだから。
メルレイアは、レイノルの視線を振り切るようにして足を動かす。
「……」
歩き出してからこちらを一度も振り向かない彼女の背をじっと見つめながら、レイノルはひとり考える。
（さっきのあれは、一体なんだったんだ……？　それに、突然姿を消した……）
いずれにしても。なにか得体の知れない者がこの学園内にいるのは確かだ。
レイノルは剣呑に目を細めて空を見上げた。

六．先輩と少女（後書き）

不定期更新です

七．少女とクラスメイト（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

七．少女とクラスメイト

メルレイアはこのまま戻って皆に迷惑をかけてしまわないだろうか、と心配しつつもホールへと向かった。

ホールへ戻ると、中央に剣を持った人物が舞っていた。人の形をとっている赤黒い靄が異形の神だろう。と、いうことは戦いの場面なのだ。

異形の神の唸り声、閃く剣身。異形の神に肉迫する竜。迫力ある場面にメルレイアは思わず息を呑む。

「……あ、メルレイアさん。もう大丈夫なの？」

皆の集中力を削がないようにするためだろう、シェリアが小声で言った。

頷いてメルレイアは彼女の側に立った。

演舞劇に視線を戻し、流れを見守る。

剣で斬りつけられ、竜の炎に焼かれた異形の神は段々動きが鈍くなってきていた。もうすぐ人間の英雄が異形の神を封印する場面だ。

と思ったら、その異形の神が霧散した。

「……もう、まただわ。――皆、話をしながら少し休憩にしましょう」

背景を作っていた幻が消え失せ、クラスメイトたちがシェリアの許へ集まる。

全員が自分の周囲に集合したことを確認したシェリアは、小さくため息をついて言った。

「……いつも、あの場面で幻が持たなくなってしまうの。元々大きな幻だから維持するのは難しいのはわかっているんだけど……。どうにかしないと一週間後の創立祭に間に合わないわ。皆でどうしたらいいか考えましょう」

シェリアの言葉に頷くが、なかなか良い案は出てこない。う、とか、あー、とか唸っているばかりだ。

「……なあ、もういっそ他のクラスから人員を借りたら駄目なのか？」
男子生徒のひとりが腕を組みながら言った。
「……それは、あまりいい案とは言えないかもしれないわ。あくまで、クラス毎での出し物ということになっていますから」
「……そうかあ」
困ったなあ、と呟いて男は口を閉じた。
「シェリアさん。このクラスには幻術が得意な人とかってあまりいないんですか？」
「実を言えば、そうなんです。幻術って規模が多いとその分膨大な魔力と集中力が必要になるでしょう？　それと、精神力も、かしら？　うちのクラスはそういうのが苦手意識が強いというか、苦手で……あまり幻術向きって人はいなくて。どちらかというと血気盛んな人が多いから。なにかを壊したりするのだったら、向いているのかもしれないのだけど……」
シェリアの言葉にメルレイアは引き攣った笑みを浮かべた。
破壊するのが長所のクラスって。
「……今、あの幻は何人で？」
シェリアは少し考える素振りを見せてから言った。
「ええと。背景の幻が十二人で、炎の演出や声なんかの調整の人たちが五人。竜の幻が二人で、あの異形の神と戦う場面だけ、背景の幻のメンバーの中から三人抜けてもらって行っているんです」
残っている自分や英雄役のレヴィン、シェリアも含めて二十五名で演舞劇をこなすのか。
人数から考えれば充分やっていけるのだが、人には得意、不得意がある。幻術の基礎は長い時間集中していられることが大事だ。集中を欠けば、それまで現実と思わせていたものが本当の幻となって消える。どんな相手にも今見ている光景は現実だ、それは本物だと思わせることができれば、幻術を真に極めたと言えるだろう。
「……交替で幻を出しているんですよね？」

「ええ、二人、もしくは三人の組に別れてやってもらっています」
「どちらかというと魔力よりもたぶん、集中力が問題ですよね？」
歯に衣着せぬ物言いで、ずばりと言い切ったメルレイアに、シェリアは苦笑した。
「……どちらかと言われれば、そうだと思います」
「私今はまだあんまり魔術使うのは得意じゃないんですけど……幻術はそれなりに仕えると思います。なので、私あの異形の神が出る場面の手伝いをしたいんですけど……」
「それがいいかもしれませんね。……でも」
シェリアの言いたいことは分かっていた。
私一人が加わったくらいで、幻が維持できるのだろうかと彼女は思ったに違いない。
「とりあえず、やってみませんか？」
メルレイアの言葉に、シェリアはそうねと華のような笑みで頷いた。
「やってみましょう。何度もやっていれば、集中力もつくかもしれませんし。さあ、皆さん。創立祭まで時間がありません。休憩は終わりにしてもう一度やってみましょう」
シェリアの掛け声に、クラスメイトたちは各々返事をしてから所定の位置へと戻っていく。
「メルレイアちゃんはこっち」
いつの間にかリリアが側にいた。
腕を引っ張られて転びそうになるが、体勢を立て直し彼女に並ぶ。
「あの場面のメンバーは……あ、いた。オルトス！」
「なんだ？」
名を呼ばれて顔を上げたのは茶色の髪をした青年だ。彼がオルトスなのだろう。
「メルレイアちゃんに説明してあげて。それじゃ、私は反対側だから」
「お、おい」

走って行ってしまったリリアに、オルトスは伸ばした手を引っ込めた。
「ああもう……、くそっ」
その手を頭に持っていき盛大に髪を掻きまわした彼はゆっくりと自分を見た。
癖のあるぼさぼさの髪や眠そうな目。今にも欠伸の漏れてきそうな口。総じてどこか気だるげな、やる気のないような印象を受ける。
「……とりあえず自己紹介しとくか。俺は、オルトス・ヘミュア。で、こっちがジュダ・ラーカトス、んでそこにいるのがアルテシア・ノラヴィアだ」
「よろしくお願いします」
「よろしく」
「よろしくお願いします」
挨拶をし頭を下げてオルトスを見ると、彼は苦い顔をしていた。
「あー、俺はあんまり説明とか上手くねえんだよなあ。ていうか苦手なんだよなあ」
「それなら、僕がしようか？」
ジュダが首を傾げる。
「ジュダ、またあんたは。そうやってなんでもかんでも助けちゃ駄目でしょ！」
「えー？」
「いいじゃねえか、アルテシア。演舞劇ももう始まってるみたいだしなあ。ジュダの説明の方が的確で時間がかからねえし、分かりやすいだろ」
「まあ、それはそうなんだけど……」
不満が残る顔で頷くアルテシアだが、それ以上なにかを言おうとはしない。
「えーと、じゃあ。僕から説明させてもらうね。まず幻術の発動はこの書簡に書かれた魔法陣を使用してやるんだ。両手をこの上に乗せて魔力を流し込めば発動する」

「魔法陣……？」
「うん、そうだよ。いちいち呪詞を唱えてたら、幻を維持するのが難しいからね。……まあ、高位の魔術師だったら、僕たちみたいなことはしなくてもいいんだろうけど」
そう言ってジュダは笑った。
「じゃあ、続けるね。異形の神のイメージはさっき見てもらったから分かると思うんだけどね、えっと、僕たちは……というかどこもそうだと思うんだけど、幻を作りだす人、動かす人に役割が別れてるんだ。三人で幻を作り上げて動かすとなるとどこかでずれが生じちゃうから。僕らの班は作り出すのがオルトスで、動かすのはアルテシアと僕。で、メルレイアには今回オルトスの手伝いをやって欲しいんだ。メルレイアは転校してきたばかりだけど、流れや動きが分からなくてもこれならできるだろうし。あ、ここからはオルトスも聞いといてね。二人には今回連結魔法陣を使ってもらうから。今、僕が即席で用意したからもしかしたらなにか不備があるかもしれないけど、そこは二人とも自力でカバーして」
「……自力かよ」
「が、頑張ります……」
「うん。で、普通は相容れないはずの魔力を連結魔法陣は融合させることができるから、今までよりもたぶん持続時間は上がると思う。でも結局オルトスとメルレイアちゃんの集中力と魔力量の問題だね。それが短かったり少なかったりすると話にならないし」
「二人はどうやって幻を操るの？」
「僕たち？　僕たちは風の精霊を喚び出して、空気に溶け込ませる。精霊たちを目の代わりにして君たちの幻術に干渉する」
「干渉？　どうやって？」
首を傾げるとジュダが足元の紙に描かれている二つの陣を示した。
「君たちの使う魔法陣を少しいじったものだよ。これで君たち二人の作りだした幻に働きかけることができるんだ」
「へえ……」

すごい。よく出来ている。
メルレイアは単純に感心する。
「あ、そうそう。幻を消すタイミングなんだけど、二人の間で合図かなにか決めといてよ」
「……あ？　ああ。分かった」
オルトスが面倒だなあ、と呟く。
「よし、それじゃあ説明は終わり。まだ僕たちの出番まではあるから、二人は合図でも決めといて。出番がきそうになったら声かけるから」
「分かった」
「はい」
頷くとジュダはアルテシアと連れだって、舞台が見える位置に移動して行った。
「――で、合図だけどな。消す間近に俺が召喚したファイアリザードに合図させる。そしたら俺が掛け声をかけるからそれに合わせてゆっくりと流し込む魔力を減らしていけ。いいか？」
オルトスの襟首の辺りから尻尾の先の尖った真っ赤な蜥蜴が這い出してくる。それを一瞥して頷く。
「わかりました」
「じゃあ、それで決まりだ」
そう言ってオルトスはどん、と連結魔法陣の描かれた巻物の側に腰を下ろした。
メルレイアもそれに倣う。
ここからは、舞台の様子は見えない。音や悲鳴が聞こえはするが、さっきのようにはならない。きっと、あの光景を見ないで済んでいるせいなのだろう。
昼食を済ませたあとであることと、少し薄暗い場所にいるせいなのだろう。じっとしていると瞼が落ちそうになる。
寝ては駄目だ、と自分を叱咤しメルレイアは眠気を振り払うように軽く首を振る。

そうやって時間にしたら三十分近く――睡魔と格闘していると、小走りにジュダが走り寄ってきて言った。
「――二人とも、もうすぐだよ。ほら、準備して。魔力を流し込むタイミングは僕が合図するから」
「わかった」
「はい」
メルレイアはオルトスと共に連結魔法陣の上に手をついた。
その状態でジュダの合図を待つ。
目を瞑っていたジュダが、さっと自分たちを振り向いて言った。
「やって！」
「――っ！」
「……！」
声にならない声で気合を入れて二人は自分の魔力を解放した。
魔力が吸い込まれるようにして魔法陣の中へ流れていく。
目を閉じて黒いあの靄を想像する。人の形を取った靄を。恐ろしさが伝わるように、色は完全な黒ではなく赤黒い靄を。濃淡をつけて、想像する。集中して、はっきりと思い描く。自分の目の前に想像物がいる。そう思って想像する。
メルレイアたちが集中したのを確認したジュダとアルテシアもすぐに作業に移る。
（――よし。僕たちも始めよう）
魔法陣の上に立ち目でアルテシアに合図をする。
二人は同時に目を瞑った。
暗闇しかなかった視界が途端に明るくなる。
外だ。舞台の赤黒い靄が見える。
自分たちは風の精霊の目を通して彼らが見ているものを見ているのだ。
舞台の中央に異形の神と向かい合っているレヴィンが見える。
ジュダとアルテシアは協力して赤黒い靄に思念を送り、その体を動かす。

決められた通りに、しっかりと。
異形の神の右手が唸り声とともに英雄役のレヴィン目がけて振り下ろされる。
『グゥウウアアア……！』
レヴィンは蝶のようにひらりとその攻撃を躱した。そして、二度異形の神の腕を斬りつける。
『グゥウウ……！』
異形の神の歪な悲鳴が木霊する。
（次、左！）
ジュダとアルテシアは突き出すように左手を動かした。
これもまた、あっさりと躱されまた数度腕を斬られる。
『シャアアア！』
リオール神から遣わされた竜の幻が、咆哮して炎を吐き突っ込んでくる。
炎を浴びた異形の神は身を捩るが、炎だけでは仕留めるにはいたらない。
ジュダとアルテシアは突っ込んでくる竜を受け止めるべく体を反転させて、両腕を伸ばした。
竜の頭を掴んで放り投げ、異形の神の体をレヴィンの立っていた方へ向ける。
しかし、そこに彼はいない。
異形の神に上を向かせる。
彼はそこにいた。人間の跳躍力とは思えないほど高い位置まで飛んでいた。
刃煌めく剣を振り上げていた。
異形の神は抵抗することができず、真っ二つに斬られてしまう。
『グウウァアアア……！』
異形の神が苦悶の声を上げて倒れる。
ジュダとアルテシアが倒れるように動かしたのだ。
同時に地震が起きたような錯覚と地響きがする。

ドウ、という音を耳にしたオルトスはファイアリザードに視線をやった。主人の意を汲んでさっとファイアリザードは動いた。尖った尻尾の先でメルレイアの頬を突く。
ぱっと目を開いたメルレイアはオルトスを見た。
頷きが返ってくる。
「三……二……一。今だ、少しずつ魔力を抑えろ！」
小声でオルトスが命令する。
メルレイアは頷いて流し込んでいた魔力を徐々に抑制する。
その頃も舞台では演舞劇は続いていた。
原形を留めなくなっている異形の神にレヴィンが歩み寄る。
（よし、最後の場面までいけた！　ここからは……）
空から竜が舞い降り、彼の傍らに並ぶ。レヴィンは異形の神のところまで歩き、手に持つ剣を地面に差した。
（――風を起こすんだ！）
ジュダは精霊に風を起こすよう命令する。
風が巻き起こり、異形の神の体が剣に吸い込まれていく。
やがて異形の神は全て剣の中へと消えて無くなる。
背景が打って変って明るくなり、青空と緑の大地が広がる。
英雄役のレヴィンが竜と共に大地に目を落とし、空を見上げる。
爽やかな風が吹き抜け、草を揺らす。
『シャアアアア！』
異形の神の脅威が去り、取り戻した国の平穏を慶び、人々にそれを知らしめるように竜の咆哮が辺りに木霊した。
「お、終わった……」
「そ、そうね……」
ぱっと目を開いたジュダとアルテシアがその場に座り込む。
「お疲れ」
「オルトスもね」
ジュダとオルトスは互いに労をねぎらい合う。
「だけど、メルレイアが加わっただけでこんなに違うだなんて。本

当にびっくり」
「そうだね。オルトスもそう思わない？」
同意を求められたオルトスは頬を掻きながら頷いた。
「まあな。それにしてもこいつの集中力と魔力のでかさにはびっくりしたぜ。連結魔法陣のせいかもしれないが、魔力が俺の方にも流れ込んできたんだよ。俺の足りない部分もこいつが補ってくれてたっていうか。なんていうかそんな感じだった。ほんと、すげえよ。頑張りゃこいつ、絶対上にいけるぜ」
「へえ」
「本当？」
三人に驚嘆の目で見つめられ、メルレイアは苦笑する。
「えっと、まあ、確かに魔力は普通の人より大きいみたいですけど、私今あんまり魔法の制御が上手くできなくて……だから、それができるようにならないと上級の魔法師になんてなれませんよ」
「だから、頑張りゃ、って言ってんだろ。努力しろよ、努力」
「うわっ。オルトスに一番似合わないし、言われたくない言葉じゃない」
「確かにー」
ジュダが笑って頷く。
「おい、お前ら。どういう意味だよ」
むっとした表情のオルトスが二人を睨む。
二人はオルトスの睨みなどなんでもないというように飄々としている。
メルレイアは彼らの様子を笑いながら黙って見ていた。
「皆さん。集まってくださーい」
遠くからシェリアの声が聞こえた。
「行こう」
四人は舞台の方へ出た。
ぞろぞろと舞台裏や袖から出てきたクラスメイトたちが集まる。
「さっきのは良かったですよ。ただ、もう少し調整は必要だと思い

ますけど。声の出すタイミングとか、ですね。でも、今までで一番良かったと思います」
　シェリアがにっこりとほほ笑む。
「シェリアさんが加わっただけで、こんなに違うなんて。本当に驚いたわ」
「あ、いえ……」
微笑みかけられて、メルレイアは曖昧な笑みを返す。
「これで本番には間に合いそうです。本当にありがとうございます」
「ほんとにそんなに感謝されることじゃないですよ」
「そんなに謙遜しなくても」
　側に来たリリアにばしん、と勢いよく背を叩かれる。
「ちょっ、リリアちゃんいたっ……」
　抗議するように見つめるメルレイアにリリアがあ、ごめんと慌てて背中をさする。
　そんな二人の様子を見たクラスメイトたちの温かな笑い声がホールに響き渡った。

七．少女とクラスメイト（後書き）

不定期更新です。
これから少しストックをためる作業に入るので、更新が遅れます。
申し訳ありません。

八．狐と少女（前書き）

楽しんで読んでいただければ幸いです

八．狐と少女

二度も続けて練習したので、今日はこれで創立祭に向けての準備は終了、明日からは微調整を行う、ということで解散になった。
いつもより早い時間に終了したので、食堂に行くにも時間が早い。
やることもないので校舎の周囲をぐるりと歩いて回る。
『……なんだ？　手、痛いのか？』
「――わっ！」
驚いてメルレイアは声を上げる。
「ル、ルア？」
『そんなに驚かなくても』
「あ、ごめん」
素直に謝ると、足元にいた狐はすぐに機嫌を直し肩まで器用に登ってきた。
『手、大丈夫か？』
「心配してくれてありがとう。でも手が痛いから触ってたわけじゃないんだよ。ほら、これ」
言ってメルレイアはルアに左手首の腕輪を見せる。
『……腕輪？』
ルアの尾がゆらりと揺れる。
尾の先が頬に当たってくすぐったい。
「私の師匠からもらったものなんだけどね。特別に作ってもらったの」
『へえ。器用な師匠さんだな』
「器用……というか、二人とも色々できる人だったな」
メルレイアは師匠の姿を思い出し懐かしさに目を細めた。
『二人？　メルレイアには二人も師匠がいるのか？』
「ああ。私にはね、魔術の師匠と剣の師匠がいるんだよ」
『へえ、そうなのか』

目を丸くしたルアが頷く。
「そういえば、ルアは今までどこにいたの？」
途端ルアがきゅう、と鳴いて項垂れる。
「どうかした？」
顔を覗き込むとルアが小さな声で話しだす。
『あれ捜してた……』
「あれって？」
『黒くて怖いもの。ここにいちゃいけないものだ』
ルアが苦いものを噛みしめるようにして唸る。
『見つけたんだけど、途中で見失って……それからまた捜したんだけど、もう見つけられなかった』
悔しげにルアが顔を歪める。
「……そう、それは残念だったね」
メルレイアは手を伸ばしてルアの頭を撫でる。
されるがままになっているルアが呟く。
『早く見つけなくちゃいけないのに……』
「どうして？　もしかしたらこの学園の外に逃げちゃったのかもしれないよ？」
『それはない……と思う。だって……』
なにか言いたげにルアはメルレイアを見上げて口を開きかける。だが、結局首を振って言うのを止めた。尾が力なくぱたり、と落ちる。
ルアの様子からなんだか話を聞く必要がありそうだと判断したメルレイアは、近くの樹の近くに腰を下ろす。
「なにか話したいことがあるんなら、聴くよ？」
『いい。本当になんでもないんだ。大丈夫だ』
「本当に？」
『うん。心配なんかしてもらわなくても、俺は大丈夫だ。……それより、メルレイアの方がなにか話したいことあるんじゃないのか？
俺でよければ聞くぞ？』

「……なんでそう思うの？」
努めて平静を装って聞く。
『顔に書いてあるぞ、って言いたいけど。なんとなく、なんとなくそんな気がしたんだ。あんまり元気がない感じがしたから……。俺、人間結構見てきたから、な』
ルアがメルレイアの肩から膝の上に飛び降りる。
金の瞳に真っ直ぐ見上げられてメルレイアは苦笑した。
（ルアは聡いんだなあ……）
精霊は総じて人より長生きだ。持つ力の大きさによって寿命の長さは違っても。精霊の中には人を好ましいと思ってくれている者も、そうでもない者もいる。
人を好きだ、と力を貸してくれている精霊は特に人間と接する機会が多くなる。そして、人の機微を学ぶのだ。
メルレイアはふっと痛みを堪え微笑を浮かべた。
「……少し、昔話をしようか」
『うん？』
ルアが目を瞬き尻尾を振りながら首を傾げる。
メルレイアはルアの頭を撫でながら、昔の記憶に思いを馳せ語り出した。

八．狐と少女（後書き）

誤字脱字などお気づきがございましたら遠慮なくお願いいたします

九．記憶の中の思い出（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

九．記憶の中の思い出

「メル、この方がこのラタリア学園の校長先生だよ。――私の古い友人だ」

メルレイアは師匠の側に立つ白髭の老人を見た。

「くっくっく……君に先生と言われるとはね。それに君にとっては古いというほどの長さは付き合っていないだろうに」

なにがおかしいのか、彼は腹を押さえて笑っていた。

「今生きている中では君との付き合いが一番長い、と言えば良かったのかい？」

師匠が困ったように眉を寄せて笑っている。

「まあ、そうだな……くっ」

まだ笑いが治まらないのか彼は腹を片手で押さえながら、もう片方の手で涙を拭った。

メルレイアはわけがわからずに彼と師とを見比べた。

どうやら友達、というか顔見知りではあるらしいが、友達という表現があまり適していないことがなんとなく二人の雰囲気から分かった。

かといって昔の仲間だった、という感じでもない。二人の関係がよく分からない。

「……あーあ、よく笑った。で、この娘はなんだ？　お前の隠し子、なんてことはないだろうな？」

もう歳は五十、そして学園の校長でもあるというのに、随分彼は失礼なことを言うものだとメルレイアは顔を顰める。

「そんなはずないでしょう」

メルレイアは彼に向かって否定の言葉を述べる。

「メル。彼は昔からこういう性格なんだ。突っかかっていると疲れるだけだよ」

笑顔でさらりと酷いことを言う師に、メルレイアは目を丸くした。

「ひどいなあ、その言い草は。さすがの俺でも傷つくぞぉ」
口ではそう言っているものの、彼は笑顔のままで全然傷ついているようには見えない。
「隠し子じゃねえってことは、じゃあ、その子はお前の秘蔵っ子ってことか。ふーん……」
品定めされるように上から下に視線を下ろされ、メルレイアは眉根を寄せる。
「随分鍛えられているようだが、本当にお前の秘蔵っ子かあ？」
疑わしげな目で彼は師を見た。
「ああ。この子には剣の師匠が別にいるんだ。でも、私の弟子ではあることに間違いはないよ」
「ああ、なるほどねえ……それでか、ふーん……」
白髭を撫で下ろして彼は納得したようにひとりでひとしきり頷いていた。
「あの、校長先生……」
なんだかいつまで経っても本題に入りそうにないので、仕方なく話に割って入る。
「ルビンスタック、だ！」
突然の大声にメルレイアは肩を跳ねらせる。
「ああ、驚かせちまったか。すまんな。校長先生って呼ばれるのがどうにも俺は嫌いでなあ。鳥肌が立つんだよ。だからな、ルビンスタックって呼び捨てか、もしくはルビンスタック先生って呼ぶようにしてくれや」
な、頼むと言われてメルレイアは首を上下に振った。
「は、はい……」
「聞きわけが良くて助かるぜ」
豪快に笑うルビンスタックの笑い声が辺りに響く。
「で、メル」
「それは愛称です。メルレイアと呼んでください」
すかさず入ったメルレイアの訂正にルビンスタックが首を傾げる。

「でもよお、こいつが今さっきメルって呼んでなかったか？」
「師匠はいいんです。……もう諦めました……」
何度言っても聞いてくれないんです、と肩を落としたメルレイアにルビンスタックが頷く。
「そうか、そうか。お前も苦労したんだな……」
同情したルビンスタックが慰めるように肩を叩く。
「で、どうしたんだ？」
即座に元に戻ったルビンスタックの変わり身の速さに驚きつつ、メルレイアは用件を切り出した。
「師匠？」
メルレイアは師匠を見上げる。
「ああ、そうだね。君にちょっとお願いがあって来たんだ」
「お願ぃ？　お前がお願いなんて珍しいな」
ルビンスタックがなんだ、言ってみろと先を促す。
「この子を学園に入れてあげて欲しいんだよ。――この子は長く人と離れ過ぎた」
一瞬、ほんの一瞬だけ周囲の空気が下がってまた元に戻った。
「……まあ、校長の権限を使えばわけねえけどよ」
「それじゃあ」
師の言葉をルビンスタックが片手を挙げて遮る。
「待て。そうは言っても俺はそんなに甘くねえ。一応、試験は受けてもらう。それも、今すぐにだ」
「今すぐ？」
メルレイアは戸惑い気味に師匠を見た。彼は肩をすくめる。
言うとおりにするしかないでしょう。
そう言いたいらしい。
「……それで、なにをすれば？」
「実技試験を受けてもらう」
「実技試験？」
「そうだ、メルレイア。相手は俺。制限時間は三十分。その間に俺

に一撃でも喰らわせられれば、入学を認める。手段は魔術だろうと剣でだろうと構わねえ。ただ、俺自身に一撃入れればいい」
「三十分で一撃入れる……？」
メルレイアは軽く俯いて言葉を反芻した。
「どうだ？　やってみるか？」
師匠に目をやると、力強い頷きが返ってきた。
「――やります」
メルレイアはルビンスタックの視線を受け止め頷く。
「よし、それじゃあ移動だ」
三人は校舎の裏側にある修練場に移動する。
広い。
広すぎるというほど修練場は広かった。修練場には誰もいない。今はどのクラスも講義中らしい。
「さて、始めるかあ？　どっからかかってきてもいいぞ。お前が攻撃を仕掛けてきてから三十分だからな。いつでも来い」
ルビンスタックがメルレイアの攻撃に備えて防御の構えを取るった。それまでおどけたような様子だったルビンスタックに剣のような鋭さが宿る。
「メルレイア」
フルネームで呼ばれた。滅多に呼んだりはしないのに。
メルレイアは師匠を振り返った。
「五割ですよ」
「……七割」
「駄目です」
「じゃあ、六割」
「駄目です、五割です」
「六割」
「五割です」
「それは無理です。六割じゃないと」
五割だ、六割だとわけの分からない二人の会話に、ルビンスタック

の気が削がれる。
「……なんだあ？」
一体なんの話をしてるんだ。
「それはそうでないと難しいということですか？」
「いえ、そうじゃなくて。一番良い状況で終わるにはこれぐらいでないと、たぶん……」
「……なるほど。分かりました。それじゃあ、六割ですよ。それ以上は――」
師匠の言葉は風の唸りの中に消えた。
「――うぉっ！？」
ルビンスタックは抜剣と同時に疾風の如く懐に飛び込んできたメルレイアに目を剥いた。
咄嗟に腰の剣を引き抜き堪える。
辛うじて攻撃を受け流したルビンスタックは、攻撃に転じようとした。
「――雷華」
らいか、と彼女は呟いた。
メルレイアの双剣から青白い電撃が迸る。
「詠唱無視、だと！？」
ロア・スルーともそれは呼ばれている。詠唱も魔術の基礎も、なにもかもを無視し捻じ曲げて己の力のみで構築された魔術。
電撃を纏う剣身は猛り狂う竜のように地面を抉り、時折とんでもない方向に飛んでいく。
メルレイアの凪いだ瞳が自分を見た。
「……！」
息を呑む暇も無かった。瞬く間に彼女の姿は消えた。
どこだ、どこに行った。
「――――！」
「っ！」
いた。

否。
彼女はそこに現れた。忽然と自分の目の前に。
空気を裂くような、爆ぜるような音と共に双振りの剣が振り下ろされる。ルビンスタックは剣で防ぐことができずに正面からその攻撃を受けた。
「ぐぅあっ……！」
吹っ飛ばされ激しく壁に叩きつけられた、というよりめり込まされたルビンスタックは剣を落とし、その場にずるずると崩れた。
メルレイアはそんな彼を一瞥し、片方ずつ剣で空を斬った。
空を斬った方の剣から雷光が失せていく。
「……ったく、こりゃひでえな」
横腹の辺りを押さえてルビンスタックは蹲る。
打ちつけた背中に鈍い痛みがある。息をすると胸部に激痛が走る。もしかしたら骨が折れているかもしれない。
だが、しかし言うことは言わないといけない。
顔を上げる。
「とりあえず一撃は確かに受け取った。……合格だ、入学を許そう。しっかし……」
剣を鞘に収めたメルレイアが小走りで師匠の側に戻る。
あれだけの動きをしたというのに、彼女の息は少しも乱れていなかった。
（まさか、五割、六割って……加減してやがったのか……ていうか、あれで……？）
笑みが引き攣る。こっちは魔術を使っちゃいなかったが、もし自分が使ったとしても勝てたとは言い切れない。互角がいいところか。
……笑えない。本当に。
「……どんな鍛え方してんだよ……あーあ、服も焼け焦げてもう着れねえじゃねえか」
「剣の扱い方に関しては私の方に聞かれても困るよ。あの魔術はこの子の努力の結果だ、と言っておこうかな」

ふふふと笑う師匠にルビンスタックがああ、そうかよと不満げな顔をする。
「怪我をしたんじゃないのか。私が治してやろう」
ルビンスタックの側に膝を追った師匠が杖の先を彼に向けた。仄白い光がルビンスタックの体を包む。
「お前ら二人とも、ったくなあほんとに……なんなんだよ……」
「うん？」
「いや、なんでもねえ……なんかもう笑うしかねえよ……」
ルビンスタックがどこか遠い目をして笑うので、メルレイアは首を傾げる。
「……もういいぞ。だいぶ楽になった」
ルビンスタックが手を振る。
「そうかい？」
師匠が少し驚いたような顔をして杖を引いた。
「さてと。入学の手続きをしなきゃならないな」
ルビンスタックは立ち上がって砂埃を払う。
「お前の弟子は俺が責任を持って預かる。任せろ」
「ああ、頼む」
短い会話だった。
しかし、その間に確かなものがあることをメルレイアは感じた。
『それじゃあ、メル。お前はここで学ぶべきことを学びなさい。そうすれば――』
師匠の体は消えかかっていた。
彼は空間を捻じ曲げて移動しようとしていた。空間と空間を行き来しようとしているのだ。
瞬間移動。
『その先で、きっとまた会えるでしょう』
そう言って師匠は消えた。どこか別の場所に移動したのだ。
メルレイアはルビンスタックに向き直る。
「よろしくお願いします」

「ああ。よろしくな」
頷いて差し出された手をメルレイアは握る。
「よし。それじゃあなんだ。とりあえず部屋にでも案内するか」
「あ、はい。でもその前に、あの……」
歯切れの悪い彼女の様子にルビンスタックは首を傾げる。
「どうした？」
「あれ」
メルレイアは壁と渡り廊下の屋根、地面の順に指差した。亀裂の入った壁、破壊された屋根。抉られた地面。惨状を見たルビンスタックがかくん、と大きく口を開ける。
「なんじゃこりゃあーっ！」
校舎中にルビンスタックの素っ頓狂な声が響く。そんな彼の隣でメルレイアは身を小さくして、ひたすらすいません、と謝っていた。

九．記憶の中の思い出（後書き）

誤字・脱字等不自然な箇所ございましたら遠慮なく指摘をお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0623y/

英雄少女§ヒーローガール§

2011年11月24日23時52分発行